

自分自身に降りかかる問題への自己防衛策を考える

下流老人に陥ってしまった場合の対策

下流老人にならないための「予防」

下流老人に陥ってしまった場合の対策

対策：知識の問題 - 生活保護を正しく知っておく

制度をよく理解することが、下流化を防ぐ第一歩

対策：意識の問題 - そもそも社会保障制度とは何か

生活保護に対する意識を革新する必要がある。

生活保護は「お恵み」や「恩恵」であるという意識は間違っている

「社会保障を受けることは権利である」 - 学説上は確立している

生活保護を受けることに負い目を感じる必要はない

対策：意識の問題 - 何よりもまずプライドを捨てよ

個人のプライドを捨てて、目に見えない制約から自由になるとよい

「人様の世話にならないことが美德」という意識をかえること

すべての人はいろいろな面で他の人たちが社会、環境に依存して生活している

注：「プライドを捨てよ」という表現(原著)が適切でないのではないかと思う(中川)

政府は、申請主義から脱却し、社会保障制度に対する啓発活動を行うべきだ

生活保護費を受給するまでの基本的な流れと要件：

受給したい場合、まず住んでいる地域の福祉事務所の生活保護担当に申請する

福祉事務所：各区・市が設置、町村部では都道府県が設置

住民票が無くても、最寄りの福祉事務所で申請できる

福祉事務所では、制度の説明があり、申請を行える

受給内容や要件について詳しくは、最寄りの福祉事務所やNPO団体などに相談するとよい

保護申請すると、次のような調査が行われ、生活保護の認定が行われる

対象者の生活状況などを把握するための実地調査(家庭訪問など)

預貯金、保険、不動産などの資産調査

扶養義務者による扶養の可否の調査(親族からの送りなどの可否)

社会保障給付(年金など)や就労収入などの調査

就労の可能性の調査(労働の可否)

保護の受給要件：

「世帯単位で行い、世帯員全員が、その利用しうる資産、能力その他あらゆるものを、その最低限度の生活の維持のために活用することが前提」

資産の活用：預貯金、車や宝石、利用していない不動産、積み立て型の保険など。

注：生活に利用している土地や家屋は売らなくてよい、車も仕事や通勤通学に必要な不可欠なら所有が認められる

能力の活用：「働くことができる状態かどうか」を意味する

注：能力があっても、働く場所や機会に恵まれなかったときは、受給が認められる。

調査の結果、保護が決定すると、「最低生活費」＝「年金・収入等」－「保護費」が毎月支給される

保護費の支給額と内容：

保護費は、年齢、世帯人数、地域などで違う。世帯単位に支給される。

生活保護基準額表が各地方自治体のHPに掲載されている

例：都区内に住む単身無収入高齢者の場合：
「生活補助費」約8万円、
「住宅補助費」約5万円

この他に、「医療扶助」や「介護扶助」が受けられる(本人負担なし)

他にも、義務教育年齢の子どものいるとき「教育扶助」、妊娠しているとき「出産扶助」などがある

対策：医療の問題 - 今のうちから病気や介護に備える

医療にアクセスできない人が生まれないように社会保障制度がつけられてきた

「無料低額診療事業」：生活困窮者のために、無料または低額な料金で診療を行う事業

「無料低額診療事業」：社会福祉法第2条で規定している

各都道府県にある、民間の医療施設。

病院の医療相談室のソーシャルワーカーに相談して、受診する

生活困窮者、外国籍の人、健康保険証がない人、ホームレスの人など、誰でも利用できる

対策：「任意後見制度」を活用するとよい

心身が健康なときに「任意後見制度」を活用して、予め老後の世話を頼む人を選任しておくとい

認知症と診断されたとき、身体が弱ってきたと感じたときなどに処置しておくとい。

下流老人にならないための「予防」

予防編：お金の問題 - まず貯蓄をしておく

予防のためにまず考えられるのは預金だ。

早い段階から家計を管理して、可能な限り少しでも貯蓄していくことを心がける

高齢社会白書では、「世帯の高齢期に向けて必要と思う額」は、1000万円くらい19.5%、2000万円くらい19.7%、3000万円くらい19.1%

注意すべきは、わたしたちの高齢期は昔と違い相当に長い、

また、病気や事故で突発的にまとまったお金が必要になる可能性も高い。

資産形成・運用に関しては、個人年金、民間保険、株、債券、投資信託などいろいろある。情報を集めて、要注意。

予防編：心の問題 - できるだけ多くの人と助け合いの関係性を築いておく

「プライベート・コミュニティ」を充実させておくことも下流化を防ぐ

個人レベルで作る相互扶助のためのコミュニティ

高齢期に孤立する前に、なるべく多くの人と助け合いの関係性を築いておく

家族や親族とこまめに連絡を取っておく

地域の人々との交流も重要。隣近所との関係は、高齢期になるほど影響が大きい。

人付き合いにはある種のわずらわしさが伴うが、いざというときの発見や援助のきっかけになる。

同じ貧困に苦しんでいても、幸せに過ごしている人と、悲惨な生活を送る人がいる。

「人間関係の貧富の差」が幸福度を決定する、と実感する。

生活が貧しくても、料理を持ち寄り、おしゃべりをしたり、老人クラブで踊ったりしている人は、貧困に陥らない。

できる限り働く(出会いや交流を主眼に楽しみながら働く)ことも、人間関係の貧困を防ぐ。

予防編：居場所の問題 - 地域のボランティアや市民活動に参加しておく

予防編：居場所の問題 - 地域のNPO活動にもコミットしておくこと

地域のNPO活動や多種多様な市民活動に参加することも、人間関係の強化になる

参加できるうちはボランティアや市民活動を、できなくなったら相互に助け合いを

予防編：意識の問題 - いざというときのために「受援力」を身につけておく

「受援力」というのは災害分野でよく聞く概念

「受援力」= 「支援される側が、支援する側の力をうまく生かし、生活の再建に役立つ能力」

「受援力」は受け手の意識に関わっている

当事者の「貧困から立ち直ろうとする前向きさ」で支援のスムーズさが違う

支援をしやすい方： 話しやすい、プラス思考、自分から問題解決に当たる、自分の問題を把握している、支援方法や制度を学んでいる。

気軽に相談に来てくれて、問題が複雑化する前にアドバイスできる。

問題が発生したら、早めに相談し、速やかに支援を受けられるような体制と心構えを自分のなかで作っておくこと

支援が困難な方： かたくなに心を閉ざしている、自暴自棄になっている、マイナス思考、問題解決に消極的、問題を把握できずやみくもに行動する、など。

支援者との間に信頼関係が築けないで、支援がうまくいかない。

即座に支援できず、信頼関係の構築から始めなくてはならないと、問題解決までの時間や道筋が異なる。

幸せな下流老人の共通点： 人とのつながり、人間関係を豊かに持つ

実は、私が知っている貧困高齢者にも、幸せな人は沢山いる。

不幸せな人との違いは、明らかに「人間関係」にある。

貯蓄があっても、下流老人になるときは、なる。だから、お金以外の部分が、豊かな老後のためには大事だ。

20～50代前半の人は、仕事中心、経済優先で、ひたすら働いている人も多いかもしれない。

老後が見えてきた50代後半からは、家族など人とのつながりを中心にした生活に価値観をシフトしていく必要がある。

配偶者や子ども、家族、友人などの周囲の人間関係を大切に。

それがやがて、自分自身を救うセーフティネットになる。

人生は長いし、苦難が多い。その苦難と一緒に乗り越えるためにも、自分の苦しみを理解してくれる人を。

関係性の貧困を克服することが重要だ。

「幸福」をどう捉えるかは、個人次第だ。

最低限度の生活保障は必要だが、文化的な暮らしを維持できるかは、老後の人間関係が大きく左右する。